

## ムザッファル朝の成立

杉山 雅樹

イル・ハーン朝末期にヤズドを中心に成立したムザッファル朝は、周辺の地方政権との抗争の過程で支配領域を拡大し、1393年ティムールの遠征によって滅亡に追いやられるまで、現在のイラン中・南部の大部分を支配下に治めた。さらに一時はアゼルバイジャン地方にまで進出し、旧イル・ハーン朝領土の再統一の可能性もあったほど強大な力を有した。しかし、ムザッファル朝に関するこれまでの研究は、概論的なもの、あるいはシーラーズの詩人と君主の関係から王朝の政策を考察する研究がほとんどで、ムザッファル朝の専論書でさえ「モンゴル人对イラン人」という単純な二項対立による説明に終始している。そこで、本発表は初代君主ムバーリズッディーン・ムハンマド Mubāriz al-Dīn Muḥammad 治世における支配領域拡大の経緯を振り返り、様々な政策の意図と影響について検討を行うことによって、ムザッファル朝領内の諸状況の変化と王朝の成立を支えた要素を明らかにすることを目的とする。

王朝成立の直接の要因となったのは、ムバーリズッディーン之父ムザッファルがイル・ハーン朝オルジェイトゥからヤズド地方の諸道の管理を委ねられたことであった。父の職務を受け継いだムバーリズッディーンは、忠実に遂行したことによって、イル・ハーンの厚遇を受け、アブー・サイード期にはヤズドのアタベクに代わってこの地の支配権を授与された。アブー・サイード死後の混乱期には、チョパン朝との同盟を通して、ケルマーンの支配権を獲得、その地で活動する遊牧集団を軍隊組織に取り込むことに成功する。さらにファールス地方を支配するアブー・イスハーク・インジュ Abū Ishāq Injū との同盟と戦闘を繰り返す中で国力を増強し、やがてシーラーズ、イスファハーンを征服する。イスファハーン征服によるインジュ朝崩壊後は、かつてインジュ朝軍に含まれていたファールス地方周辺の遊牧集団を新たに軍隊に加えた。この新しい軍隊によってタブリーズを征服し、ムバーリズッディーンは最盛期を迎えたのであった。以上のようなムザッファル朝の対外戦略を支えたのは、支配権の拡大に伴って軍に取り入れられたモンゴル系を始めとする様々な遊牧集団と、ムザッファル朝台頭期から中軍を形成し、君主の直属軍として活躍したイラン系軍人の

融合によって形成された軍隊組織であった。

内政面では、ムバーリズディーン治世を通じて、ヤズドの有力者との関わりが深かった。ヤズド統治時代にはスーフィー・シャイフが保護の対象となり、講和交渉をスーフィーが務めた例がみられる。やがて王朝の中心地をケルマーンに移してからは、スーフィーが政権に関わることはなくなる一方、ウラマーが積極的に政策に関与するようになった。これは、ケルマーン地方の遊牧集団AwghāniyānとJurmā'iyānの存在が大きい。すなわち、ムザッファル朝軍にとって重要な構成要素であると同時に、反乱を繰り返す両部族への攻撃に対する国内の支持が必要となったのである。そこで、ムバーリズディーンはウラマーから彼らが「不信心者」であり、彼らへの攻撃は「聖戦である」というファトワーを得たのであった。ケルマーン統治時代には、ヤズド出身のウラマーを宮廷に招き、マスジド・ジャーミヤやダールスィヤダという新たに建設した宗教施設の人事面においても、ヤズドのウラマーに対する優遇処置がみられた。こうした事実は、先のファトワー発布に関して、ヤズドのウラマーが深く関わっていたことの証といえるのではないだろうか。

イル・ハーン朝崩壊後の混乱期には、各地方政権は自身の王朝に権威を付与する政策を模索した。ムバーリズディーン治世においては、スルターン位を得るための二つの政策を挙げることができる。まず、ケルマーンのカラヒタイ朝の血統を持つ女性を妻にすることで、後継王朝としての地位を手に入れ、ケルマーン支配の正当性を主張した。さらに、1354-5年にはエジプトのアッバース朝カリフにバイアを行った。これは、シーラーズ征服後のAwghāniyānらによる反乱と新たに支配領域に組み込まれたファールス地方での反ムザッファル朝の不満分子の活動によって、様々な要素で成立していたムザッファル朝の統治基盤が危機に見舞われたことに対する措置であったと考えられる。これまでも自身の支配の正統性をウラマーの支持に求めていたムバーリズディーンはアッバース朝カリフへのバイアによって、支配領域各地のウラマーの賛同を集め、世俗的な権威である「スルターン」としての地位とハディースに関連付けられた宗教的権威を帯びた君主の地位を獲得することに成功したのである。

以上のように、ムザッファル朝は成立期から様々な民族の遊牧民、定住民、中でも政権に深く関わるウラマーなど重層的な共存関係に支えられていた。こうした事実から、ムザッファル朝が「イラン人政権として対モンゴル」を意識した政策を行ったという結論導き出すことはできない。むしろ国内のモンゴル系遊牧集団を取り込みつつ、チンギス・ハーンの後裔を傀儡ハーンとして据えたジャラーイル朝やチョパン朝とは異なる独自の権威を目指し、ウラマーが代表する宗教的支持によって国内の安定を図ったと考えられるのである。

(京都大学西南アジア史学科博士課程)